

働き方5.0

これからの世界をつくる仲間たちへ

落合陽一 著

著者は、筑波大学准教授として活躍中の30代の新進気鋭の知能化技術研究の専門家である。

今年の「新型コロナウイルス」の蔓延により、今までの「社会の前提」がすべて変わり、働き方の大変革が求められている。

これまでの「狩猟社会1.0」、「農耕社会2.0」、「工業社会3.0」、「情報社会4.0」に続く新たな姿として、著者は「働き方5.0」の時代と定義し、「AIやロボットが幅広い分野で進化し、人間とともに働いていく時代」を想定している。

国の2020年までの「科学技術基本計画」では、「仮想空間と現実空間を融合させた高度なシステムにより、経済発展と社会的課題を同時に実現する、新たな未来社会」を想定し「Society 5.0」と定義している。(注:最近注目の第5世代移動通信システム5Gとは異なる)

本書では、これからの時代、ますますコンピュータやAIが進化していく中で、「人間がやるべき仕事とは何か」を探究し、「機械では代替できない能力を持つ人材」として生き抜くには、「社会とどう向き合うべきか」について述べている。また、コンピュータが人間の社会にもたらす変化は、「昔より便利になった」とか「生活が楽になった」という次元ではなく、「人間の生き方と考え方」に変革を迫る、「第二の身体であり、脳であり、知的処理を行う蛋白質の遺伝子を持たない集合体の隣人だ」として

いる。学校教育については、これからのコンピュータやインターネットがもたらす技術的・文化的変化によって具体的に何が起こるか、その変化

がどういう意味を持つかが理解できず、従来の工業化社会的な教育を子どもたちに与えていると指摘している。一例として、小学校からの「英語教育」を取り上げ、将来のキャリアに役立つ多言語力はコンピュータで代替できるので、身に付けさせたい語学力は単なる会話力でなく、「コンピュータが翻訳しやすい論理的な言語能力や自らの考え方を明確に表現できる能力」の育成が大切だとしている。

プログラミングにしても、「できる」だけでは意味がなく、「自分の考えをロジカルに説明して、システムを作る能力」が大切で、現代における人間的能力を鍛えることを求めている。

「人間がやるべきことは何か」としては、今後「IT革命」以上の変革がこれから何度も起こるとして、「次の世界」に向けて何を学ぶべきかについて、「コンピュータが不得意で人間がやるべき」ことは、「新奇性」や「オリジナリティ」を持つ仕事だと述べている。

親や教師は子供の目標に成功者の事例を示すが、「成功者が、なぜ今の時代に価値を持っているのか」を考えさせ、「自分を肯定し、己の価値基準を持つべき」とも指摘している。

また21世紀になり、コンピュータや経済・社会活動の複雑化により、「なぜそうなるのか分からない」ことが多くなり、「再魔術化」=「ブラックボックス化」を指摘している。

今後のものづくりについては、今まで我々は「パーツ」の組み合わせで物を作ってきたが、これからは、あらゆるものづくりに3Dプリンタのような、パーツに分けずに立体成型する物づくりが求められるとしている。

「あとがき」では、これからの時代は世界をこう変えたいというモチベーションが重要とし、かつ個性的な世界観を持つ人間ほど強くなれるとまとめている。

(小学館新書、A5判、205頁、820円+税) (山下省蔵)